

一三二六番

照左豆が 手に巻き古す 玉もがも その緒は替
へて 我が玉にせむ

一三二七番

秋風は 継ぎてな吹きそ 海の底 沖なる玉を
手に巻くまでに

一三二八番

膝に伏す 玉の小琴の 事なくは いたくここだ
く 我恋ひめやも

一三二九番

陸奥の 安達太良真弓 弦著けて 引かばか人の
我を言なさむ